

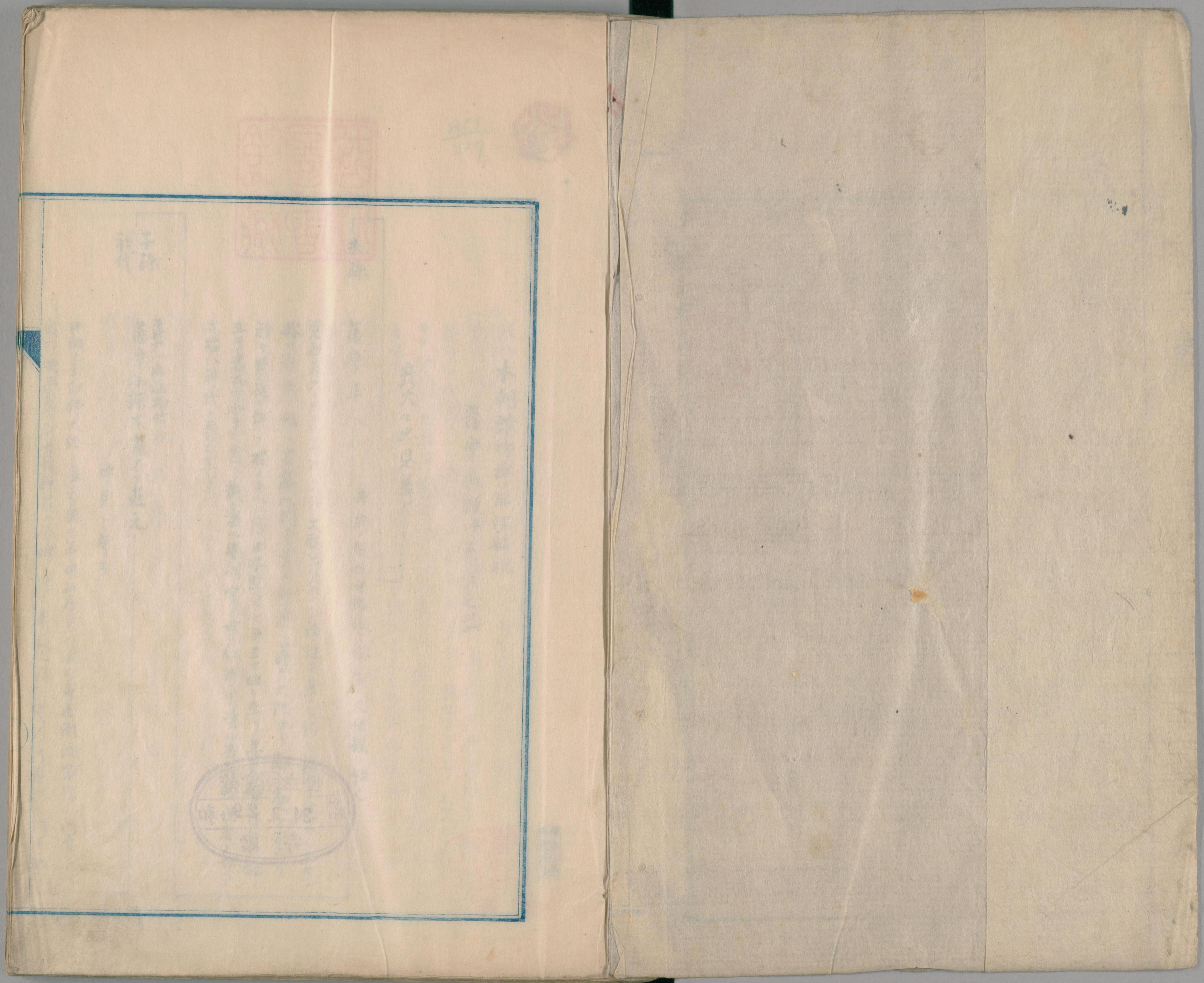
863
227

音曲家譜
全



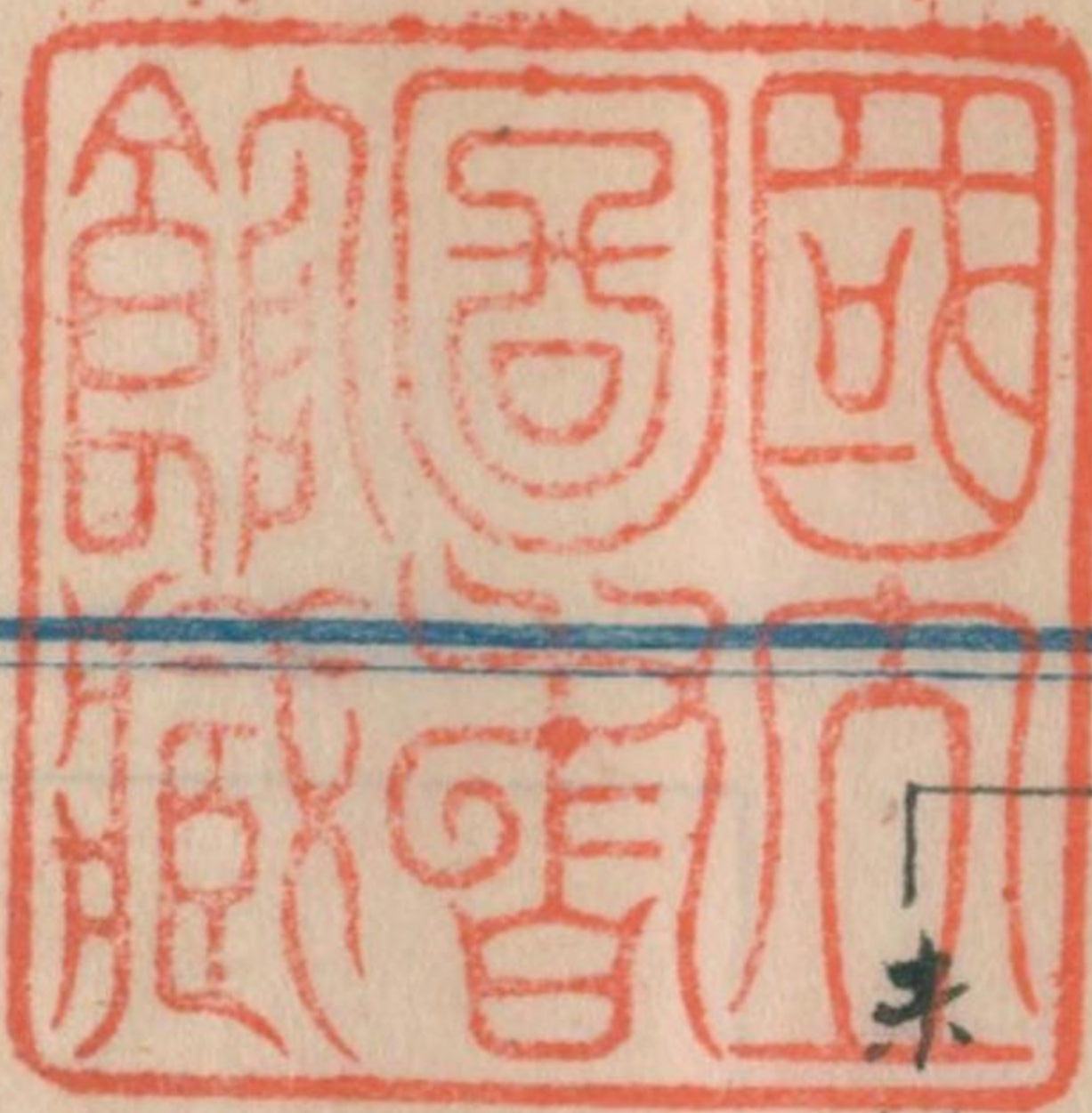
国立国会図書館 タイトル『音曲家譜』 請求記号 863-227

ガラス使用





863
227



未孫

子孫
初代

本朝謠物淨瑠璃始祖

薩摩家譜并系圖之序

赤火々出見尊

薩摩集人

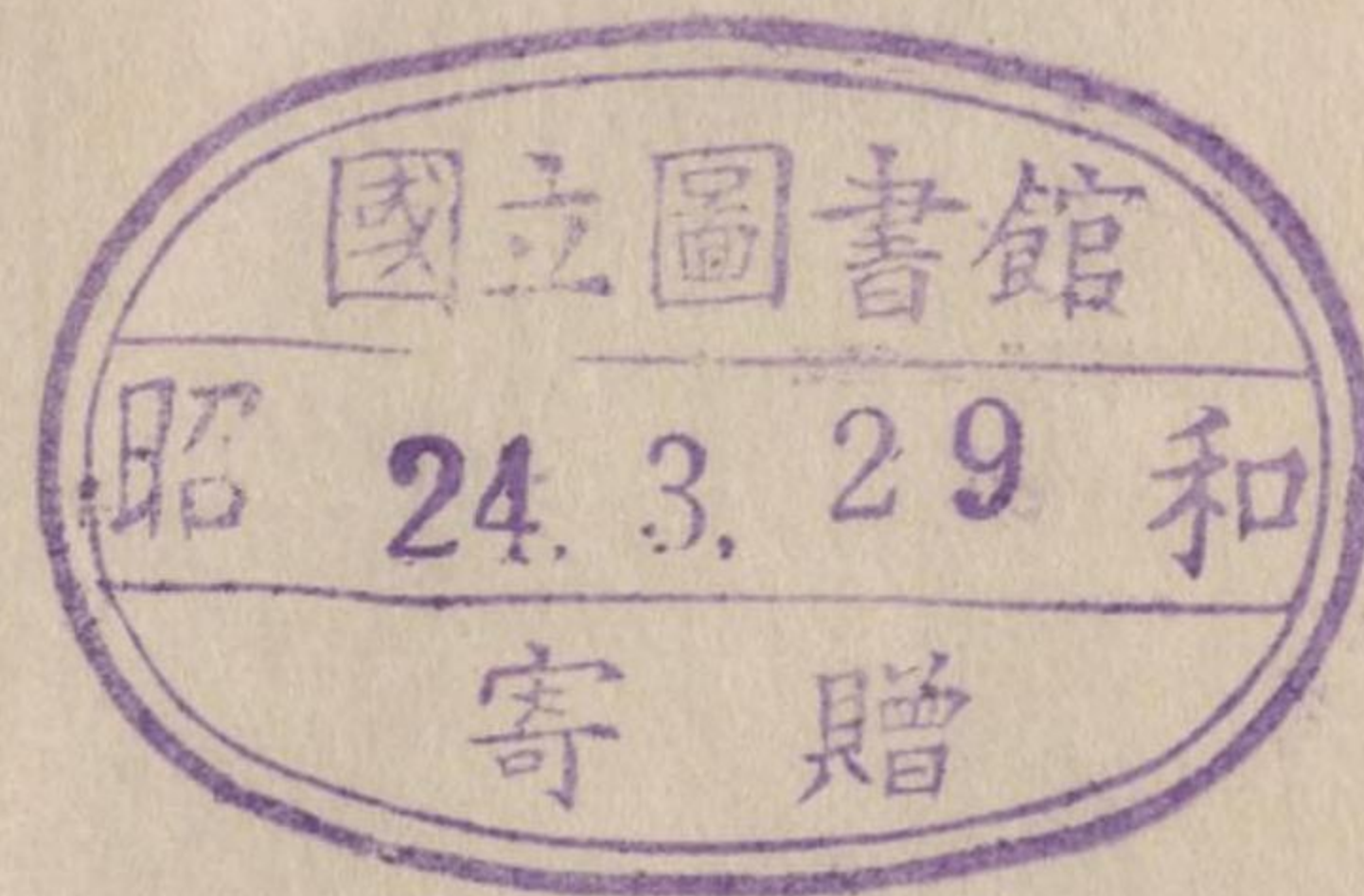
舞樂始祖也凡俗ノ哥聲又俗妓ノ始也

先祖赤火々出見尊淨瑠璃神大御行今下流位ヲ奉ヒ給ヒ海上ニ怪サシ玉ヒミ
蘇ヲ舞樂ノ作リ右集人門牙ヲ打連シ薩摩大隅ヨリ都ノ度々登リ
於テ禁庭ニ舞ノ右ノ更ハ後日本記才七才三十四ニ在リ赤火御行今下流
云テ赤火々出見尊ニ意リ蘇臺ニ是列今ノ世ニ紅紗ヲ塗ル哥聲妓役者ノ始也
之右ハ神代ノ巻ニ在リ

薩摩一流謠物始祖
薩摩小源太藤原直元

淨見ト号ス

日向ノ玉印杵大縣ノ薩元龜三年甲辰月京ニ住ヌ多志流岩後ノ門牙ト
成リ天正三年庚申七月和泉ノ玉坡ニ住ヌ平家一流ヲ定メ今ノ世ノ初ノ門牙ト



東橋原製

テ一流ノ流義ヲ長田小年太ニ傳フ

二代

長田
薩摩小年太藤原直良
澤慶ト号ス

幼名又ノ名ヲ嗣小波布ト云々長三酉年入道ニテ澤云ト号ス又ノ之々
ル薩下一流ノ流義ヲ傳ヒ更テ諸ル又西ノ宮ノ傳備作ニ習ヒ標人形ヲ云々
ニテ傳フ又

三四
警中小路

方々流ノ流義ヲ澤文保ニ受ヒ年流秘玉ヨリ二流ノ樂置渡ル同人是
ヨリ持托所ニ流故ニ澤津備ワラズ是ニ依テ同人考ユ吏ヲ以テ猶一系ヲ
相加テ三流トナヌ所是ニテ音津備ワル依テ澤云ト号ス又吏ヲ成ニ
澤和公是外本朝三流ノ根元ニ同人澤云ト号ス又依テ檢校中流檢校ニ傳フ亦
外野通サレ秘曲奏ノ小年十三歳ヲ作ス右ノ右村檢校ニ傳フ

東
藤原
製

三代

本相澤淵理大夫之祖
薩摩澤雲大夫藤原直嗣

初名 薩下治序右三門
初名 源太 帝

泉元右衛門入ノ海月嗣薩下一流ノ流物ヲ讓テ十三歳ノ時出勅ニ治序
右三門ノ政名ニテ京都ニ任ヌ初ケル野ノ通サレ云々故有テ言那玉丸傳ル
リ惟ノ流トテ澤氏十二流ト云々紙ニ作ル所ナル由テ望ニ依リ高田右三門
右景流ノ文正薩下一流ノ流ヲ附テ諸ル又依テ檢校中流檢校ニ傳フ又
久ル三流ヲ文ノ切々(強流ニハ第ニ合セテ澤云長三酉年豊臣家
ニモ右澤氏十二流ヲ流リト所ハ薩摩トシテ大夫ノ官名賜リ澤下
澤云大夫ト号ス是外傳ルリ流リ大夫号ノ始ニ亦右澤抑テ世上ノ人
澤淵理ト云ナラワス故ハ澤淵流ト云テ流ル故ニ云々右澤抑テ世上ノ人
入門ノ少種々ノ流義ヲ云々世ノ流ヲトナシ其姓名傳ルリト唱フ亦依
任檢校流檢校澤野檢校澤妻檢校右舟檢校小園勾苗柳川檢
校等ハ皆加テ一右澤流ト云テ流ノ故ニ依テ世ノ流ヲト
成述ニ流流方ノ教養ニ相ナリ大夫門内多ク出来リトテ流多ク云
テ流ル右澤流在門一交入流トテ澤云ト号ス所故有テ再知ニ澤



豊太夫ト改公嗣子ナキニ依テ祖父小治太ノ累孫カ孫ト嗣

江戸大薩摩三徳元祖杵屋勘五郎

天下
四代

下リ江戸大薩摩始祖
薩摩浄雲大夫藤原直壽

始名 三代

薩摩治高右卫門虎彦ト号

幼名 カ孫

初代小治太ノ累孫カ孫又三代薩摩治高右卫門ト改公寛永三十三年江戸
戸三下リ浄雲大夫カ嗣而年四辛卯年母所ニ於テ櫓ヲ上テ櫓ヲ舞
テ致ス右ニ付是迄ノ三徳孫音人カ改公寛永三十四年元祖杵屋
勘五郎ト号ニ三徳孫ト仕ス人カ夫カ以テ浄雲ト号妻カ作ス是
江戸大薩摩浄雲ト号ト始メ是ヨリ江戸ノ流リニ江戸浄物ノ指ニ相
ル門外大夫三徳教人出未所々ニ於テ終リ又右カ世孫小薩摩ト云尚
作家カ大薩摩ト云子佃有テ浄雲致ス

東橋屋製

五代

薩摩外記大根藤原直政

始名

惣右衛門

又

薩摩大夫

浄泊理ノ元祖浄雲ノ門外惣右衛門後薩摩大夫ト改メ京都ニ於テ
櫓座ヲ興ル又白保元甲申年 後老明院棟所藏傳ノ傳外記
大根ノ授領ヲ以テ惣右衛門世後物語 業平小舟屋台在三重ノ其後
江戸ニ下リ四代浄雲大夫ノ孫カ嗣キ史記年中ニ櫓座ヲ再興ス三徳
勘五郎ニカ工門カ為メ又同年中右座ニ於テ四カ方奉侍ヲ興ル又中
村座ノ役者カ為メ長門大夫賜テリ

史記ニ在但帳

大夫薩摩外記大根藤原直政

薩摩 左内

三徳

杵屋勘五郎

薩摩 文五郎

同 云右工門

小舟 多門 云右工門

コノ様着 山名ノ
口々様着 三作
名古云ト云 口々真想
口々五席

謚物

吾妻梅道下り 叔母前
鳥帽子折 山崎二岐

以上

直政死去、後座ヲ門外内ニ讓リ

大史薩摩丸内入道ニテ調海ノ政ム

口々 薩摩 宮内

保直直政死去ノ後座ヲ讓吏ヲ兵行仕又処三四年ニテ休養
致ス

六代

大薩摩外記藤原直勝

東橋原製

初名 薩摩 文五郎
後 大薩摩之振忠夫

正徳二壬辰年操を再興又故有テ古代ヨリ大薩摩ト改メ彼所クワロコ
矢車ト改ム四五年ニテ休養仕テ予薩摩(出勅又ハ以テ市川圖中
帝始メテ文ノ根立而テ兵行又右ヲ主膳太史名有テ相勅公ニ味線
七代目持を奉ニテ第附ニテ豊ヲ保ホ京條ハ豊外年二月ニ程
中村勅ニ帝百年忌ノ壽拜言與テ付市川圖中帝若年ノ細川
ト云拜言ヲ勅公右ヲ大薩摩外記系系直勝名前ニテ勅公ニ任去代
目持を奉ニテ作ニテ孫
宝丁九年己卯十月八日没入若伴也(五寺)葬ス

法号 円覚院宗宣信士

七代

大薩摩朝日大夫

又 大薩摩文五郎之孫

初名

又也二郎

又ト云シ勢部俊重(五郎)又

淨心寺中善徳院(善久)

法号 觀月院吐曉一郷日住居士

十六代

大薩摩平経太夫藤原直光浄空

俗称 十六代目 将左 勘五郎

江戸男系系後三味線之元祖十世将左勘五郎始ノ別家将左十一
代目三右エ門之巻子トナリ三右助自才嗣女大薩摩平名目嗣
形ハ此故其之以後元氏辰年ハ月別家ヲ巻子ト相譲リ布衣ヲ嗣
士代将左勘五郎ト改属又右左目ハ以テ大薩摩三味線之元祖ト
以テ依以交相及薩摩浄空リ家元多ク右京圓相ト譲リ将又十代
目申村ハ傳教ヨリ譲リ譲リ一札ヲモ送リ付右号ヲ浄空ト
薩摩浄空所出件在在寺ニ清
十代薩摩浄空太夫直光浄空ト改名家元嗣年

東橋貞敷

三代目

本朝浄瑠璃之祖

薩摩浄雲太夫藤原直嗣

門牙 之下

薩摩丹後太夫藤原清澄

後年 秋山丹後景ト改

俗称 杉山士郎在才

皇朝の系を傳へて二代目となり、此の代に中村和五郎が、其の系を傳へて、
所傳を傳へて、時を順をとり、めき三徳の系を傳へて、大評判ありしなり

曰三代松島和五郎

二代目松島和五郎の門下より、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、
他より三代目となりしなり、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、

三徳松島和五郎

三代目松島和五郎の門下より、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、
一代限りしなり、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、

曰 和島和五郎

和島和五郎の門下より、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、
あり、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、

曰 和島和五郎

和島和五郎の門下より、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、
あり、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、

和島和五郎の門下より、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、
あり、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、

曰 二代松島和五郎

二代目松島和五郎の門下より、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、
あり、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、

曰 三代松島和五郎

三代目松島和五郎の門下より、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、
あり、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、

三代目松島和五郎の門下より、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、
あり、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、

東林堂製

長嶺松永金三郎

金三郎の門下より、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、
あり、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、

曰 松永金五郎

松永金五郎の門下より、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、
あり、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、

曰 二代松永金五郎

二代目松永金五郎の門下より、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、
あり、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、

三代目松永金五郎の門下より、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、
あり、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、

曰 三代松永金五郎

三代目松永金五郎の門下より、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、
あり、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、

曰 四代松永金五郎

四代目松永金五郎の門下より、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、
あり、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、

曰 五代松永金五郎

五代目松永金五郎の門下より、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、
あり、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、

六代目松永金五郎の門下より、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、
あり、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、

曰 五代松永金五郎

五代目松永金五郎の門下より、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、
あり、其の系を傳へて、和五郎の系を傳へて、

神田松永町に傳せり

二代目孫三郎

三代目孫三郎

四代目孫三郎

長唄 富士田吉次

三郎

三郎

三郎

初代孫三郎の門下にて始末金三郎と号し後作の跡を継ぎて孫三郎と改む

折々長元十代目の門下にて始末金三郎と号し寛政年中三目孫三郎の跡を継ぎて三代目孫三郎とあり後作の跡を継ぎて孫三郎と改む

三代目孫三郎の子として父より名を譲りて四代目とありて長治の初紅と号し始末の能俊依の川百五郎の門下にて依の川の子と云ふ事ありしか始末の能俊依よりバ唄の初とありて一年孫三郎と改む

長治の初紅と号し長治の能俊依の川百五郎の門下にて依の川の子と云ふ事ありしか始末の能俊依よりバ唄の初とありて一年孫三郎と改む

目下の門下とありて長治の能俊依の川百五郎の門下にて依の川の子と云ふ事ありしか始末の能俊依よりバ唄の初とありて一年孫三郎と改む

代末軍の能俊依より始末の能俊依の川百五郎の門下にて依の川の子と云ふ事ありしか始末の能俊依よりバ唄の初とありて一年孫三郎と改む

初代孫三郎の門下にて始末の能俊依の川百五郎の門下にて依の川の子と云ふ事ありしか始末の能俊依よりバ唄の初とありて一年孫三郎と改む

初代孫三郎の門下にて始末の能俊依の川百五郎の門下にて依の川の子と云ふ事ありしか始末の能俊依よりバ唄の初とありて一年孫三郎と改む

初代孫三郎の門下にて始末の能俊依の川百五郎の門下にて依の川の子と云ふ事ありしか始末の能俊依よりバ唄の初とありて一年孫三郎と改む

東橋屋製

三代目千代

富士田音流

二代目音流

三代目音流

四代目音流

富士田新流

二代目新流

三代目新流

新流

初代孫三郎の門下にて始末の能俊依の川百五郎の門下にて依の川の子と云ふ事ありしか始末の能俊依よりバ唄の初とありて一年孫三郎と改む

初代孫三郎の門下にて始末の能俊依の川百五郎の門下にて依の川の子と云ふ事ありしか始末の能俊依よりバ唄の初とありて一年孫三郎と改む

初代孫三郎の門下にて始末の能俊依の川百五郎の門下にて依の川の子と云ふ事ありしか始末の能俊依よりバ唄の初とありて一年孫三郎と改む

初代孫三郎の門下にて始末の能俊依の川百五郎の門下にて依の川の子と云ふ事ありしか始末の能俊依よりバ唄の初とありて一年孫三郎と改む

初代孫三郎の門下にて始末の能俊依の川百五郎の門下にて依の川の子と云ふ事ありしか始末の能俊依よりバ唄の初とありて一年孫三郎と改む

初代孫三郎の門下にて始末の能俊依の川百五郎の門下にて依の川の子と云ふ事ありしか始末の能俊依よりバ唄の初とありて一年孫三郎と改む

初代孫三郎の門下にて始末の能俊依の川百五郎の門下にて依の川の子と云ふ事ありしか始末の能俊依よりバ唄の初とありて一年孫三郎と改む

初代孫三郎の門下にて始末の能俊依の川百五郎の門下にて依の川の子と云ふ事ありしか始末の能俊依よりバ唄の初とありて一年孫三郎と改む

初代孫三郎の門下にて始末の能俊依の川百五郎の門下にて依の川の子と云ふ事ありしか始末の能俊依よりバ唄の初とありて一年孫三郎と改む

八代中村兵衛

三代目 長友

長根 中村 兵衛

二代目 兵衛

初代 兵衛

将を海三郎よりしと云ふ

二代目 兵衛

三信 将を海三郎

二代目 信十郎

三信 将を海三郎

三代目 信十郎

竹本長根よりしと云ふ
竹本よりしと云ふ
竹本よりしと云ふ
竹本よりしと云ふ

将を海三郎よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ

初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ

初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ

初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ

初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ

初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ

初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ

初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ

東棟原製

作十郎の長を継いで三代目作十郎と名どり

四代目 信十郎

七代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
七代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
七代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
七代目将を海三郎の門下よりしと云ふ

三信 将を海三郎

六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ

二代目 信十郎

初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ
初代の子よりしと云ふ

三信 将を海三郎

六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ

三信 将を海三郎

六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ

三信 将を海三郎

六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ

三信 将を海三郎

六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ

三信 将を海三郎

六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ

三信 将を海三郎

六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ
六代目将を海三郎の門下よりしと云ふ

二 二代目 和吉 初代の子よりて文化文政中市村屋を勤めり

三 三代目 和吉 二代目の子よりて市村屋を勤めり

四 四代目 和吉 三代目の子よりて現今佐吉所子位なり

五 三代目 務五郎 初代和吉の門下よりて寛政九年より中村市村を勤めり

六 二代目 務五郎 初代よりして初めは後師と号し村を勤めり

七 三代目 務五郎 初代村を勤めり

八 三代目 務五郎 初代村を勤めり

九 三代目 務五郎 初代村を勤めり

十 二代目 務三郎 初代の子よりして初めは後師と号し村を勤めり

十一 二代目 務三郎 初代の子よりして初めは後師と号し村を勤めり

十二 三代目 務三郎 初代の子よりして初めは後師と号し村を勤めり

十三 三代目 務三郎 初代の子よりして初めは後師と号し村を勤めり

十四 三代目 務三郎 初代の子よりして初めは後師と号し村を勤めり

十五 三代目 務三郎 初代の子よりして初めは後師と号し村を勤めり

十六 三代目 務三郎 初代の子よりして初めは後師と号し村を勤めり

十七 三代目 務三郎 初代の子よりして初めは後師と号し村を勤めり

十八 三代目 務三郎 初代の子よりして初めは後師と号し村を勤めり

十九 三代目 務三郎 初代の子よりして初めは後師と号し村を勤めり

二十 三代目 務三郎 初代の子よりして初めは後師と号し村を勤めり

東橋屋製

二 三代目 和吉 初代の子よりて文化文政中市村屋を勤めり

三 三代目 和吉 二代目の子よりて市村屋を勤めり

四 三代目 和吉 三代目の子よりて現今佐吉所子位なり

五 三代目 和吉 初代和吉の門下よりて寛政九年より中村市村を勤めり

六 二代目 和吉 初代よりして初めは後師と号し村を勤めり

七 三代目 和吉 初代村を勤めり

八 三代目 和吉 初代村を勤めり

九 三代目 和吉 初代村を勤めり

十 三代目 和吉 初代村を勤めり

十一 三代目 和吉 初代村を勤めり

十二 三代目 和吉 初代村を勤めり

十三 三代目 和吉 初代村を勤めり

十四 三代目 和吉 初代村を勤めり

十五 三代目 和吉 初代村を勤めり

十六 三代目 和吉 初代村を勤めり

十七 三代目 和吉 初代村を勤めり

十八 三代目 和吉 初代村を勤めり

十九 三代目 和吉 初代村を勤めり

二十 三代目 和吉 初代村を勤めり

三印とあり

二代目伊十郎 二代目の門下より伊子三郎と改めたり。初師の名を継ぐも

三代目伊十郎とあり。後四代目伊三郎の養子と改めたり。伊子三郎の門下より伊子三郎と改めたり。初師の名を継ぐも

四代目伊十郎 四代目の門下より伊子三郎の養子と改めたり。初師の名を継ぐも

長根芳村孝次郎 二代目芳村伊三郎の門下より父改の門下より伊子三郎と改めたり。初師の名を継ぐも

二代目孝次郎 二代目芳村伊三郎の門下より父改の門下より伊子三郎と改めたり。初師の名を継ぐも

三代目孝次郎 二代目の門下より父改の門下より伊子三郎と改めたり。初師の名を継ぐも

長根芳村孝三郎 三代目芳村伊三郎の門下より父改の門下より伊子三郎と改めたり。初師の名を継ぐも

二代目孝三郎 二代目芳村伊三郎の門下より父改の門下より伊子三郎と改めたり。初師の名を継ぐも

と改め後父の海を継ぐては名を改め長根芳村孝三郎と改めたり。初師の名を継ぐも

東棟屋製

長根家譜

若山五郎

若山五郎

若山五郎

若山五郎

若山五郎

三代目伊十郎 三代目の門下より伊子三郎の養子と改めたり。初師の名を継ぐも

明物離子方之記

中村重三郎

百治の頃之名家として世流の小鼓を能くし中村を以て明物の本
を傳へて打しりしなり

中村重三郎

將を家元三代目重三郎の四男として幼く中村重三郎に傳へて受け教
を能くせり万治三年より延宝三年と中村重三郎を初め種々明物離子他
手を傳へし註言合せしこと此多量傳明物の根元と云ふ門あり
右林傳平次 中村伝左門 國清右三門 中村ハハ 中村重次三郎等
明物離子方之記

中村海平次

延宝三年より中村重三郎を初め小鼓を能くし

中村太郎次

延宝三年より中村重三郎を初め小鼓を能くし

中村又右三門

延宝の頃中村重三郎を初め小鼓を能くし 二代目又右三門は
代の門ありし竹田重三郎と云ふは徳二年所の流を傳へしなり
改め中村重三郎の流を能くし

東橋屋製

中村 海八

二代目又右門の門方より近きのは中村海八の名字を勤め留を修む
三代目海八の門方より中村海八を勤め留を修む
たりと云ふ

中村 申之儀

二代目海八の門方より又代のは中村申之儀を勤め留此名人より何うと
申之儀より身人感せしめたりと云ふ
二代目中儀は初代の門方
より初名作書と唱へ海八の名字を修むて申之儀と改号由傳ふ者あり
名人より後又海八と改め又代のは玉川之名字を勤めたり

佐田 又七

二代目海八の門方より留を修む
三代目又七は初代の門方より又代のは三年父の留を修むて市村を勤む
三代目佐田の門方より初め海八の名字を修むて申之儀と改号由傳ふ者あり
佐田の名字を再興し三代目又七と改め下名佐田の名字を修む

佐田 新七

二代目又七は門方より又代のは市村を勤めり後今佐田新七は三代目より
佐田の名字を修む
三代目又七は門方より又代のは市村を勤めり後今佐田新七は三代目より
佐田の名字を修む

佐田 彦太郎

二代目又七の門方より又代のは市村を勤めり後今佐田彦太郎は三代目より
佐田の名字を修む
横濱町より佐田彦太郎の名字を修む

東 藤原製

佐田 清七

二代目又七の門方より又代のは中村を勤めり後今の清七は三代目より
佐田の名字を修む

佐田 又七

二代目又七の娘佐田又七の門方より又代のは市村を勤むて又
又七は佐田の門方より又代のは市村を勤むて又七は佐田の門方より又代のは市村を勤む
布衣留の門方より又代のは市村を勤むて又七は佐田の門方より又代のは市村を勤む
又七の名字を修む

西島 若くは

元武家より高田又七の門方より又代のは市村を勤むて又七は佐田の門方より又代のは市村を勤む
又七の名字を修む

西島 若くは

二代目若くは初代の門方より又代のは市村を勤むて又七は佐田の門方より又代のは市村を勤む
又七の名字を修む

田中 傳右之門

二代目若くは初代の門方より又代のは市村を勤むて又七は佐田の門方より又代のは市村を勤む
又七の名字を修む

二代目初代の実子として三代目権を継ぐ又二代目の実子として

柏崎 吉四郎

三代目傳存門の門分として天保の頃中村兼田のあやを勤む元永の頃まで
家世流の敵を能くす 二代目初代の実子として三代目権を継ぐ

望月 太右衛門

三代目伝存門の門分として天保の頃中村兼田のあやを勤む元永の頃まで
家世流の敵を能くす 二代目初代の実子として三代目権を継ぐ

福原 百三郎

三代目伝存門の門分として天保の頃中村兼田のあやを勤む元永の頃まで
家世流の敵を能くす 二代目初代の実子として三代目権を継ぐ

二代目

福原 百三郎

三代目伝存門の門分として天保の頃中村兼田のあやを勤む元永の頃まで
家世流の敵を能くす 二代目初代の実子として三代目権を継ぐ

若舎 蘆原

三代目伝存門の門分として天保の頃中村兼田のあやを勤む元永の頃まで
家世流の敵を能くす 二代目初代の実子として三代目権を継ぐ

東橋屋製

宝 山右衛門

後天意治郎と改む又以後天意治郎と改む元永の頃中村兼田のあやを勤む元永の頃まで
家世流の敵を能くす 二代目初代の実子として三代目権を継ぐ

初め相崎吉四郎の門分として天保の頃中村兼田のあやを勤む元永の頃まで
家世流の敵を能くす 二代目初代の実子として三代目権を継ぐ

如童

如童の次男子にて通称山田作

古童

通称豊田猪五郎始め如童門子として後鳳陽の門子なり終傳にて古童風操と改む

古童

通称豊永半之助初由梅山と稱し後龍傳の門子なり終傳にて古童と改む

蘆月君

蘆月の調を作る
落石の後の山法師

三代目 琴古

通称豊永半之助後幸八と改む初由琴申と云ふ文化十三年二月廿日改称龍樂寺と改む

四代目 琴古

通称豊永半之助後幸八と改む初由琴申と云ふ
文化十三年の改称

又南

通称幸我又右之門

兼柳

通称人通称名又一市

貫之

通称猪助第幾

東林原製

琴丸

通称少川半之橋

琴一

琴和

琴丸

高竹

通称白飯三右之門

丸湯

通称久松雅五郎後藤義と改む丁音柱の曲を作る

芳山

在名の入通称中西半次

峰旭

通称千利寺中正清寺次男通称半次郎

栄體

通称松下清五郎

天正五年
小唄 権左門

淡島山若之住之其物詳ナラズ小唄一流ノ人ナリト云

皇元天保五年
小唄 八之巻

権左門ノ門人ニテ淡島田所之住之小唄ヲ能クニ味得ニ奉答アリ

皇元
若山五郎之巻

小唄ノ名アリ皇元天保元流ヲ能クシテ流ト云ハレ

皇元
道玄 小三郎

若山ノ産キヤリ音教ナリ高嶺ノ江流ト云ハレ

皇元
英 一 蝶

若山ノ産キヤリ音教ナリ高嶺ノ江流ト云ハレ

皇元
中村 吉之巻

若山ノ産キヤリ音教ナリ高嶺ノ江流ト云ハレ

皇元
若田 吉次

若山ノ産キヤリ音教ナリ高嶺ノ江流ト云ハレ

皇元
小唄 一 泉

若山ノ産キヤリ音教ナリ高嶺ノ江流ト云ハレ

東林製

皇元
若伏 忠丸

若山ノ産キヤリ音教ナリ高嶺ノ江流ト云ハレ

皇元
若伏 大史之巻

若山ノ産キヤリ音教ナリ高嶺ノ江流ト云ハレ

皇元
若伏 若全

若山ノ産キヤリ音教ナリ高嶺ノ江流ト云ハレ

僅々今日奉之新法一流ノ系流ヲ憶テ又高ク以他ノ小唄ヲ名譽シテナレ
多クト皇ノ教ノ流ルヲ以テ其心家ノモノヲ揚ク流ト云ハレ
二依テハ又ニ小唄ノ流派數果ク多クト皇ノ可任也

日本拾遺高取所是書代
若伏 若全

元祿五年上作録也改む
 後延五年上作録也改む
 京都一向宗本願寺派某寺の住持智善と小松山本古作
 極は常い後同文海より執りて文海帝を廢して世
 正の選傳して降りて大夫とす都一中と改むは時の
 三徳の文海子音人依を長と云者後一件と高湖の曲合
 して信の所と如勅せりそのてを乳仲分りて構つて名
 を都里三と改む延享六年五月の事云依録かまき十世
 首を那之山中松久末の松心と宗隆の花巻を流りけ一海を
 宗流せり後都和泉様橋盛寺と交りて、斯くの後乱髪
 をて依の十徳を忌し自傳の長崎小刀を拵て世流りを
 勤め」と云京坂の田を無りし江戸より来りて京代に致す

東林原

一中節

祖山本角大夫

分

田本文海

是文海帝、親之

分

沙門智善

後文海は陸奥也

元祿都大夫一中

智善并依を長の名は何れ
 せラタルヤ
 都里三、名不審能波利ハナル
 べし一中乱髪とす
 元祿一中、江戸に去りてと云
 不審能波利ハ、以一中にテ
 二奉りテトアリ又兼武相
 多に古一中、今一中、名あり

手保七年
改元三十九
十九

二代目都大夫

二代目一平ノ別荘并法橋ノ叙
ラレタル不慮元祿ノ際ナリ
玉皇ト河上ノ不慮相傳ニシテ
官位諸君トアリ

三代目都大夫一平

三代目一平ノ初名七ノ何ニシテ
淨名堂ニシテ長七郎トシテ
以前年奉給一也勅セシ確
証アリ

四代目都大夫一平

三平ハ一平ノ弟ニシテ
人ハ一平ノ弟

元祿一平男新善大夫後別荘ノ
叙セシク享保二年門下國
大吏半中ノ後官位諸君
小別荘並常盤津ノ叙ニ
同カシテ一平保九年
改元

二代目一平の門下通稱大七と不始善大夫一平の初代より

高橋大七流りし享保九年
改元一平ノ初名七ノ何ニシテ
淨名堂ニシテ長七郎トシテ
以前年奉給一也勅セシ確
証アリ

一旦吾妻路官位大吏と改む
改元一平ノ初名七ノ何ニシテ
淨名堂ニシテ長七郎トシテ
以前年奉給一也勅セシ確
証アリ

東林堂製

五代目都大夫一平

五代目一平ハ三代目一平ノ
初名七ノ何ニシテ長七郎トシテ
以前年奉給一也勅セシ確
証アリ

六代目都大夫一平

初名七ノ何ニシテ長七郎トシテ
以前年奉給一也勅セシ確
証アリ

七代目都大夫一平

六代目一平ノ初名七ノ何ニシテ
淨名堂ニシテ長七郎トシテ
以前年奉給一也勅セシ確
証アリ

通稱一平ノ初名七ノ何ニシテ
淨名堂ニシテ長七郎トシテ
以前年奉給一也勅セシ確
証アリ

五代目一平の門下通稱大七と不始善大夫一平の初代より

高橋大七流りし享保九年
改元一平ノ初名七ノ何ニシテ
淨名堂ニシテ長七郎トシテ
以前年奉給一也勅セシ確
証アリ

一旦吾妻路官位大吏と改む
改元一平ノ初名七ノ何ニシテ
淨名堂ニシテ長七郎トシテ
以前年奉給一也勅セシ確
証アリ

四代目一平
初名七ノ何ニシテ長七郎トシテ
以前年奉給一也勅セシ確
証アリ

初養方海母に附て教年三強の傳授を以て永元年初て岸法古式部之徒
多し藝名を都堂八と稱し後毒八と改其道は修訂する十八年以て諸
後方其他藝傳りて流伎を演せしより自か有之此門牙にて作道
と名稱する者より十常名其他の門牙教百の多きより及のりし由り
中為樂津岸法、其の葛藤を生じ、遂に公武を仰ぐより其後有流
みか流したるより自か岸法よりして大に因旋を力せり此の流し
古式部死去し傳或依の代りてより子孫傳りて口人と自か之言を伝ふ
るより不終止岸法を謝脱し東條と改稱し、習く三強の業を休止して
新吾弟と稱り、廿門牙内にて藝技を志み若を抱い傳りて其流を以て

東條八郎

流せしむるは五名あり、故傳本全瓶、全瓶は是なる者あり、別号を松庭泉
と云自かより人との傳由なるを以て松庭泉の号も稱を傳ふるは、全瓶は是流
る曲を好むの癖あり、なる語より、自かより三強の業を傳へ一種の流
りを新調せしむる勸奨を以て、松の榮と號し、なる流あり、曲部を
附し初めて流し、なる上文の曲部を演説す、高橋廊内、一なり、
全瓶傳の今極男舞、松の舞を改り、と文曲部を附し、なるも別
一流松庭泉、一と名稱するの花園、其後毒八、廊内の流演説、二新曲
を業とし、高橋にて新作を演ぜり、有流を和へ、三なるも、四凡雅、
て高調を旨とせり、五なるも、六と、七と、八と、九と、一〇と、一一と、一二と、一三と、一四と、一五と、一六と、一七と、一八と、一九と、二〇と、二一と、二二と、二三と、二四と、二五と、二六と、二七と、二八と、二九と、三〇と、三一と、三二と、三三と、三四と、三五と、三六と、三七と、三八と、三九と、四〇と、四一と、四二と、四三と、四四と、四五と、四六と、四七と、四八と、四九と、五〇と、五一と、五二と、五三と、

其他華族方切少人より又社者亦在教所毛レシ氏方概又其後難より
者不之便方身序又相迎家常律より卒滿を演し何れも喝采を
夫より鐘内より由傳習者多者之レハ
大板通家常一流、復歴、小部小部何二付利上中作レハ
一高流門方人負ハ營業者より多ク、其傳習者も男女ハ多數人より
も及之禮礼免許の人負ハ品出方ハ

小豊清歌地方今之所九十三歳代

浮井清歌所

右形取 相迎家常律

明治十五年八月十日

東林原

標人形營業因是清尋付吾口以下奉止申ハ

十三道鳥居所 在里代 幸長

標人形營業業名

西川信三印 中長三郎
ヨリ三女月 吉田社二

右ハ今般自分營業標人形因是清尋付概略方奉止申ハ

商業の爲夫更常律より改革のきもの、てそ能承を承る。承継年分清田信長

の侍女下野の所通と申若云性名て義方より信長去逝の後再常律去業中侍女

召出さる日政所お通を召て信芳業に於清女細言の源代お清、其他枕巻紙より作

て名取を子歳に換見油の支智何より著作あり名を留むる仰、何れも爲通

辭しを意カ扱方都て諸人の笑及と堅く謹退より及、い、も、其後再之の仰せも是止

新修し、弟不取却年、弟より出、之入、君二、年及、い、の、こと、今、能、何、
弟、之、付、春、上、半、候、也、

1375年1月9日

吉田 冠二

十 國 三

河東節系図

元祖
一寸見河東

通称、若中節、水姓、伴、若、氏、
呂川町、三、巨、采、若、魚、高、不、り

河東ハ、不、川、何、の、家、家、節、何、天、満、を、有、若、弟、の、男、り、て、河、
東、と、号、す、
河東ハ、昔、ハ、中、姓、の、伴、若、と、母、方、の、姓、河、邊、と、も、小、其、家、何、同、在、
し、て、并、り、故、河、邊、の、河、と、若、中、節、の、家、を、東、より、え、て、河、東、と、号、す、
と、い、ふ、又、一寸、見、と、名、を、と、り、ハ、其、流、の、流、の、う、を、い、ふ、い、さ、か、り、
な、か、た、能、か、ら、い、つ、傳、ふ、と、い、ふ、意、を、と、り、三、卷、雜、記、に、い、つ、
か、ま、い、は、流、を、な、い、ふ、地、名、一、つ、い、は、若、中、を、破、り、て、河、
東、と、名、を、入、り、傳、ふ、り、弟、を、その、い、ま、若、中、と、弟、を、
和、ら、げ、自、不、市、若、と、と、廣、瀬、式、於、若、中、と、弟、を、文、え、て、
一、家、は、流、を、名、一、出、流、の、何、ま、れ、高、し、故、と、若、中、節、の、
以、分、節、は、其、若、中、一、高、と、出、て、不、作、分、命、と、て、流、り、
右、の、也、流、り、の、中、一、節、の、何、を、流、り、し、あり、若、中、節、

初代
蘭湖

安教と改めし如榮好より為中帝の命を後
らと云代自河東と改むせし人との稱を

通稱莫莖を名取しと云
出典系江戸所三丁目子伝也

之祖の門を以て廊中を於て居多し其の
唐沢を以て善士の名有りまゝ傳其由能く
せしと云系係十六年六月二十五日病に死す
清多之尸を養育寺中湖に流す葬り法也
智三自得信士と云
如と云府の唱はけし蘭湖が退骨の所の傳あり

二代
蘭湖

通稱依倉を又四郎と云
秋吉系子伝一傳あり

東棟原製

如也三代自河東と云ひて二代自蘭湖とい
ひ後利繁して十寸見志のと改めたり寛政
十二年日病に死す享年三十二歳清多の
墓丸島寺に葬る

三代
蘭湖

通稱又四郎と云新國と云者のあり
下谷池の禰子伝也

如也東と云二代自蘭湖の骨あり清蘭
木と改めし如遂に作は表ありとあり云代
自蘭湖と改む晩年別號して其凡と号
し如流傳とありふりし如は名あり也
場山土月晴と云の碑に其墓所あり云

松嶋の西方寺に女日御あり

三代 河東

通稱平氏後守等と云葉子神也葉子前川公
下谷此の端所より後守葉子揚屋町に移居是

如め河州と云二代目河東の身多あり後こ
代目をお懐比帝附吉人今此の身多あり後
乱後、初め編置の帝附由比之代目の河多子
て初め之祖初多の身多あり口中河洲蘭州
東作多て此初代あり之後ハ山彦河四帝
口中河洲白之印之身多あり其他河多あり
皆多河多身多ありし如く、初め河多あり
しと云其後故より河四帝と云初とありし

東棟原製

如く、初め之祖初多を勸め、如く河多あり
て河州河多身多の二階に於て久し
神楽舞多を云味伝より初め大い唱楽を
傳せ、と云河東を世に守り年次河東を
舞多身多し、延享二年乙丑七月二十一日
是は下谷無福所傳云、宗壽永寺に葉り
法身潭登登端信士と云

河史

通稱金太郎と云
山崎より行は

河史ハ三代目河東の身多あり、山の身多あり
名人あり、三代目河東の身多あり、自ら河東と

名乗りしより家元と奉とたり遊子奉行
所へ祈へらるる日徳島 双方共河東と名

系より由昔々一めは流と言流ととあるは家
元は敗所とあり是より河東の本拠所と云

いも出筋し一時世より河東とて名
言わりしか其後河東の名を長吉而と

いふ若くは渡り喜ぶは流と河東と云
流と河東と云

通称我らと云

河東

通称善五郎と云 榎橋人
新橋所と云

榎橋貞徳

河東

通称傳之助と云
中浪所と云

三代目河東の甥より幼年の以り美良子

あまり四代自出續の名弘めより多年の技

と語り之味伝は初代河東より喜ぶ洋より

宝丁元年の春養文河東の越後より廿日月の

洋かりの名を河東と云は流と云河東と云

て流との帯附ありしか流と云と云来りて

是より帯附の名人と云は流と云と云

より河東八年辛巳十月十五日病歿是を葬

所は前と云し法号一法回諦信士といふ

河 洲

称菅原忠房と云
兼持所は恒也

物河洲といふ四代目彼後沙洲と改名也

東 作

始菅原忠房と云
亦名東作といふ後房之子存也

四代目河東の曾子よて三代目菅原と云不存也
て東作と改む初年の頃日本新多田葉原境
内より移りしか大夫とありて後此菅原と稱
位を以て後永永五年五十歳の時歸郷去たれ
ある所の許より移り寛政十年年の秋別業
して大夫と改む翌十一年 一萬七千五百
七十三歳

東林原製

東 洲

通稱孫倉平五郎と云
始菅原と云後槍持所と改名也

新菅原の遊女ありしか河東平を改むの奈
り四代目河東の曾子とあり名を東洲と改め
澤より移りしあり永永年中菅原より親
統日本橋槍持所と恒也 一萬七千五百
七十三歳

五代
河 東

通稱新菅原平四郎と云
本名菅原と云

三代目河東の門人より始め河洲といふ五代
目河東の死後五代目河東と改名せしか元不
く同門蘭尔ハ河東と譲りて其ハ別業して

法長一書を東雲と改め暫く口キを預けり
安永五年辛申三月十二日病歿此は勤王吉祥
寺片木龍院に葬り法号 曉照院遊公東雲
居士と云ふ

東永

通称 若荷谷市市後と云
神田村久間所ニ在リ

東永ハ其代目河東の丹子あり如女神田村
久間所ニ在リハ六十歳の以出音系ハ引移
り寛政年中毀也

東曉

通称 七右衛門と云
湯治如五ノニ在リ



東雅

東曉の書代目河東の丹子あり宝丁年間毀也

通称 如右と云
湯治如五ノニ在リ

東雅ハ本ノ名所ハ産ノ漢字ニ在リといハ餅也
の養子とありハ河東市を好むのあり其代
目河東の丹子とあり其書を東雅と改め澤多
預りトありハ如右年中毀也

文永

通称 数々文永市と云
神田ニ在リ

文永ハ其ノ書ハ河東市を好む遊子為業を産シ
河東の丹子とあり文永と改め其ノ名知女
を其ノ所ニ在リ

丹前里神楽を聴きりけり此落着子河くら歌
瓦片文糸殿のま大なん人じやといひか
唄は不評とありし由今も其歌多あり
子今も忘ぬけたりし社も是をよそ
唐を罷りし子大に御昌世にあり初め文
糸の落を河東へ還り寛政三年仲夏也

竹雅

通稱平野氏
湯治西馬に伝はる

竹雅の幼より河東岸を好み其代自河東のあり
とあり竹物歌多覚え其付是音しして又而同拍
子大に能く伝へ世の名人もあり寛政三年二月病

東林堂製

文思

て死にまふ年三十七歳

通稱大森左太郎流式を田井と云
河東前河に住し後代此河岸に移住を

文思ハ一字を文魚といひて十八大通の一人とせし
其名の由来あり世に河東前河に住し其名を業
とて祈福具那藝とて河東岸を好み其代
因河東の岸に名を文思といふ其付是音しして
河同拍子とて其名あり後唐を破りて
森田河代此河岸にあり一語は寛政十二年
四月十九日病し死にまふ年七十一歳傳是田園長
因寺に葬る

代自河洲と改名せしむるに實政十一年の夏
六代自河東の養子とありて名蹟を相續し
て七代自河東とありて名弘め其後其子河内
公半以て仰言し無行せし養孫の澤よりハ
けり此節附之其後文化九年二月一日一世一
代の子を長と名ふ河内を以て得てけり
り二代自東雲と改む文政八年十一月二十四日
病歿す其子嘉平二十四歳壽終せよ
ふけりけりしあつた善所ふ六代

東林原製

日と同じ壽如院中寧休院ありて河東代
の墓所あり長命寺に葬せり法号清閑院
宗老東雲居士とす

河洲

通稱四ツ目を吉原と云
此吉原寺所の地を

河洲と云ふ文画の地ありて文洲といふ
後六代自河東の曾孫とあり河洲と改めし
あり實に七代自河東の子ありとす實政年中
病歿す墓に壽如院中寧休院あり

東里

直稱利在りと云釣竿屋あり
此吉原寺所の地を

東里
略め東里といふ後東雲と改め後年又河洲
と改め

東尔
連称東弟と云

略め東尔といふ後蘭不と改め

东尔
連称東弟と云
新傳と云

略め東尔の弟場所の河洲を分ちたりしは河洲

後七代目河東の門分とあり

東栄
通称仙名を五帝と云
河川古橋と云

東和
通称丁を五帝と云
神田多河と云

寛政元年東和を改む

東棟厚製

八代河東

通称伊东女卿と云
浅原の字と云

八代目河東ハ一字を伊東と云其の男

て茶屋を営業と云生と付長考して河東と云

略め七代目河東の分ちたり略め其の孫を

河川といふは後東洲と改め是より七代目河

洲の字を略め大夫と云り又老淋の西丸と改

め抱一上人の分ちたり又古の河田略め其の

て豊玉の分ちり文政三年十月二十三日と云

本年四十歳に後修名して八代目河東といふ
不考推所ハ侍多正若春院ありとも是も河東
代ハ長命寺の墓所ニ葬りテ法号琴砂
院相譽覺自居士と云

九代河東

通称 伊东金次郎と云

津島河内所ニ住リ後日本橋橋下所ニ移住

九代目河東ハ徳治の産也江戶ニ來リ文政
四年日本橋元大工所の跡造ニ住セ一巨源檢校
と稱シ河東節を學ビ四代目正亮河民の門
下入り同九年正亮秀松を仰ヒ与ヒ奉一和五子

東林堂製

河東の年同二月江戸ノ大夫とあり同六年加所リテ江
戸大夫の名を一晴海河岸の連中は預ケ四年十
一月別當一々十寸見可成と改む同四年一月
津島河内所より日本橋橋下所ニ移住を以年
二月廿七日ニ在り享年二十四歳市谷花内飯洞
雲寺ニ葬リ法号智山定慧居士と云後後九代
目河東と連号を以人号を以テ長命寺境
内あり河東代ハの境墓より一ツて碑を建令

五五

の作もて 名前の三法ありし ありしに 一は 源四郎が
せし 権左衛門の老年子 及び 一は 源四郎が
重なる 伊世で 譲り たり たり 一は 源四郎の 孫り 市姓
村上を 改め 山彦と 稱せし ありしに 一は 源四郎
河東四代 の 昌澤より の 名を 得 尊 名 人 と 稱せ
らる 門人 数多 ありて 皆 山彦 を 以て 姓と せり
宝正三年 丙子 丑月 廿日 病 歿 是を 牛込川 田舎 滝
風林寺に 葬り 法号 利山 浄享 信士 と する

初代

河良

神田三河河と伝はる

東林原製

二代

河良

神田三河河と伝はる

初代 源四郎 の 子 ありて 孫 山彦 と して 後 二代 自
河良 と 改む 河良 の 名 是より 代 傳 せり け
河良 号 の 雲 と して 名 あり 之 伝 を 一 所 持 せり
寛永 八年 月 日 病 歿 是を 下 谷 宗 源 寺 に 葬
り
初代 河良 の 名 ありて 孫 山彦 と して 後 二代 自
河良 と 改む 河良 の 名 是より 代 傳 せり け
河良 号 の 雲 と して 名 あり 之 伝 を 一 所 持 せり
寛永 八年 月 日 病 歿 是を 下 谷 宗 源 寺 に 葬
り

高年より小石川宮後 寺と藤と

良波

二代河長の弟中後河長と改む
甲午日如ヶ所二行を

波噴

赤城明神前二行を

文志

赤城前二行を

福志

神田明神社内二行を

小深次

子世
高多年有乃所二行を

河長より傳承此言の雲の二伝九の内なる某侯へ
上ると云ふ

三代
河長

古の日後所二行し後葉研場二行伝を

東林原製

二代目河長の身の子より始り長波といひ後之
代目をお續し七河長と改む古の弟叔也と生見
聲く二代目河長の家二行也 かく後葉研場
後行 文化十一年十月二十九日病て死を哉
孝高京所 本法寺と藤り法寺 見事院長蓮日
進信士と云ふ

良波

三代河長の身子
唐家巨勢部子

享和三年亥八月 日死を

秀波

此秀波ハ山彦トシ長平此二伝之所始り此他子

松一奏と不之儀その所新せり

良波

池の端に信長

百次

宗格尾張所二信長

初代
秀沐

世三田二信長

二代
秀沐

初代秀沐の丹子
天明年中に死す

喜三郎

思海と不二代秀沐の丹子河東の友子を勤む
通稱洪多の河川に信長

孫四郎

清多二信長
後利繁と清史と改む

長茂

孫四郎の子
後二代目孫四郎とある伝説にむつ

東棟原製

半次郎

秋吉宗二信長
寛政年中に死す

和徳

小田原所二信長
後孫三郎と改め三信長とある

良志

後秀吉と改む

字右馬

神田福町外邊二信長
松平の御子とある

字之助

信新前中

字之助の字右馬の子あり後宗と改め三信長の
上よりか何の女の子ありて被りて
を寛政年中に死す初代目河東の友力より
和徳ありて以前は和徳と改むとある

りしゆ何れも交わたりしと云はれり
是れゆへに不詳ありしと云ふに
所由不明なり

二朝

下巻の巻と信長
松竹の巻あり

廿二朝の交わりと云はれし之を
可成せり寛政十二年

七月日名記

二代 源四郎

本條門、信長

幼名を長龍といふ初代源四郎の門人
源四郎の子
あり後長龍と改めしは是れ
源の長龍とあり

二代目源四郎の名を
お續は後年解彦次郎

東林堂製

12301

源四郎の名を遷り其各ハ別替
て存候と改
め候最寛政四年十月十日
あり是れ下巻日蓮
宗本條寺に繋り法号
教體院存候日教信士と云

三代 源四郎

二代目源四郎の名を遷りて
其後を信士といふ
寛政五年別三代目源四郎
の名をお替ししは
源四郎
あり折柄河内を半次郎
と云ふて其後を
寛政十元
年五月七日あり是れ
又と日寺に繋り法号
教體院
院師教日引信士と云

19796

文次之師

通稱柳を伴物と云
吉永大門曰之也

三代
文次之師

吉永之師也

新九之師

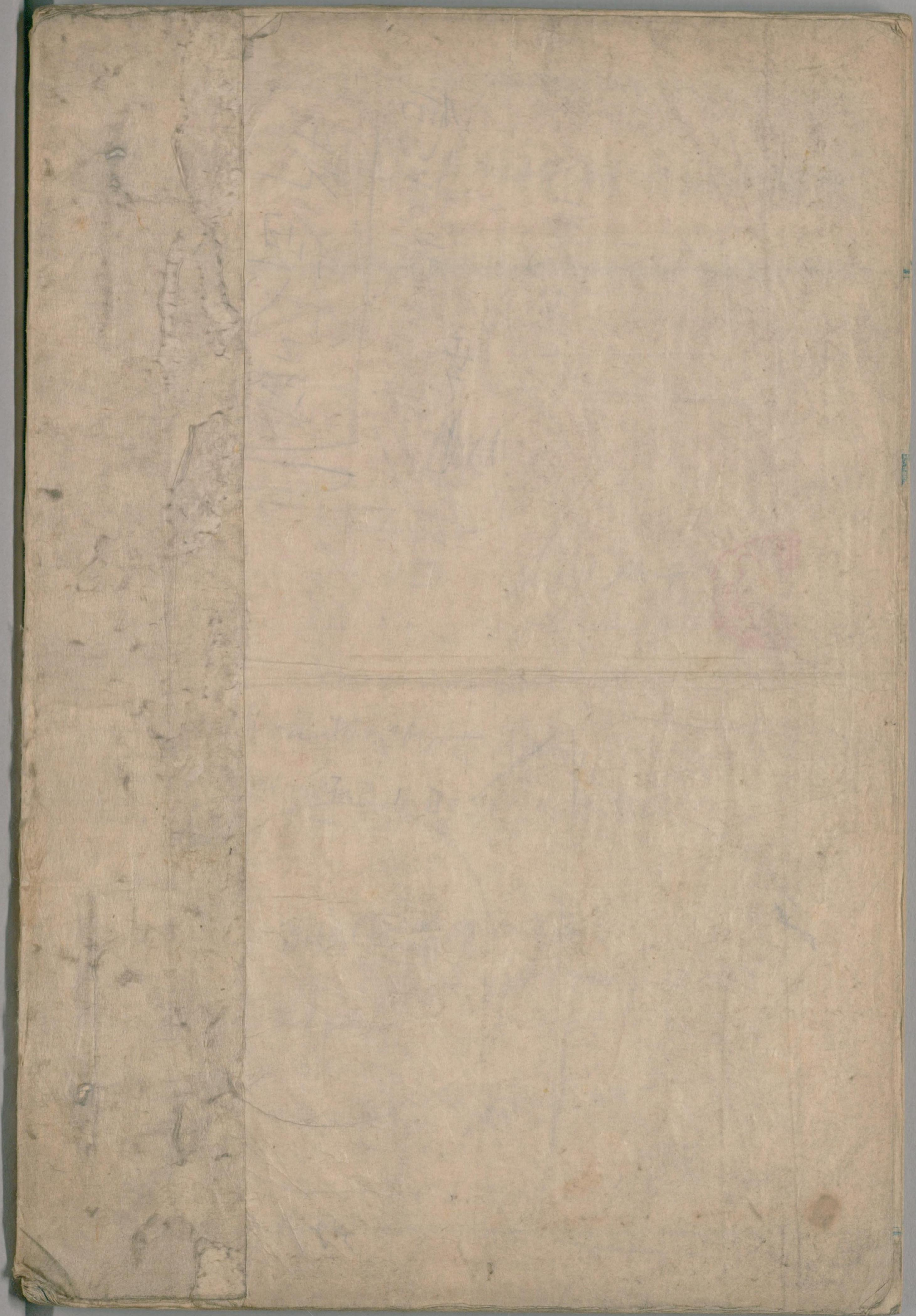
子能花の糸之役を勤む
天保辛卯

長亮

直布を振る所を勤むと云
此の傍仲野之師也

東
棟
原
製





国立国会図書館 タイトル『音曲家譜』 請求記号 863-227

ガラス使用